

平成 29 年 9 月 15 日

公益社団法人 日本都市計画学会北海道支部
平成 29 年度都市地域セミナー（兼支部 10 周年記念シンポジウム）
「軟石を生かしたまちづくり」開催報告書

開催日時：平成 29 年 7 月 27 日（木）
見学会：14 時 30 分～18 時
講演会：18 時 15 分～19 時 10 分
パネルディスカッション：19 時 20 分～20 時 50 分
会場：札幌市教育文化会館
講師：札幌軟石文化を語る会 佐藤俊義氏

パネルディスカッション

パネリスト：札幌軟石文化を語る会 佐藤俊義氏
：軟石雑貨制作工房「軟石や」代表 小原 恵氏
コメンテーター：NPO 法人歴史的地域資産研究機構代表理事 角 幸博氏
コーディネーター：公益社団法人日本都市計画学会北海道支部副支部長 小松正明

参加者：見学会 34 名
講演会 65 名

公益社団法人 日本都市計画学会北海道支部では、都市地域づくりをテーマに毎年セミナーを開催しています。平成 29 年度第一回セミナーは、札幌軟石を取り上げ、札幌を中心とした地域資源である札幌軟石を生かしたこれからのまちづくりについて、「札幌軟石文化を語る会」の佐藤俊義氏を迎え、軟石ゆかりの施設や石切り場を巡るツアーとセミナーを行いました。

以下にその概要を報告します。

【第 1 部 札幌軟石に縁のある現場見学会】

佐藤俊義氏を全体ガイドに、34 名が参加して、札幌バスターミナル発のバスに乗車し、以下のルートで現場見学会を実施しました。各ポイントでは、それぞれその施設に詳しい方に説明をしていただき、質疑応答で理解を深めました。

【札幌バスターミナル発】→【教育文化会館前で参加者乗車】→石山緑地→ぽすとかん→辻石材札幌軟石採掘所→軟石や→【地下鉄真駒内駅】→【教育文化会館】



【第2部 講演会「北海道の軟石文化」】

現場見学会に引き続き、18時15分から教育文化会館において、第2部の講演会「北海道の軟石文化」を開催しました。

冒頭に西山徳明支部長からこの10年間の活動の経緯について触れた挨拶をいただいた後、佐藤俊義氏による講演会が始まりました。

佐藤氏は、本業は造園設計会社に勤務しており、札幌市南区の藻南公園の札幌軟石ひろば建設での仕事の際に、地元の石工や住民とワークショップを行ったことが札幌軟石との出会いでした。そのときに今は機械切りとなった軟石をまだ手で切り出していた手仕事を再現してみようということになり、その際に札幌軟石の切り出し方のパネルづくりをしたことが「札幌軟石文化を語る会」の運動に続いたのです。

一方、札幌建築鑑賞会と協力をして、札幌にある軟石建築物が一体どれくらいあるかを調査し、約300軒の軟石を使った建物が確認され、こうした活動の結果が新聞などにも取り上げられて、軟石ファンを増やすことにつながりました。

札幌軟石が資材として使われるようになったのは約150年前のことで、お雇い外国人からのアドバイスで不燃建築素材としての軟石の利用が推奨されました。札幌軟石は約4万年前に支笏湖の元となった支笏カルデラ噴火による火砕流が札幌方面へ流れて出て沢地を埋めて固まった溶結凝灰岩という種類の岩で、札幌市内の近くで産出されたものが札幌軟石と呼ばれるようになりました。

軟石の運搬は、馬や馬車鉄道が使われ、大正時代になると定山溪鉄道なども使われ、この軟石が馬車鉄道で運ばれた道路が今日、石山通りという名で残っています。

溶結凝灰岩は古い火山噴火があれば見られるものであり、道内各地に地元建築素材として軟石を切り出した事例があり、美瑛軟石や網走軟石など地域独自の軟石文化があります。ただ、既に放棄された石切り場跡は森林化が進み、歴史に埋没しかけています。

明治から昭和初期までは札幌軟石造りの建物が多く作られましたが、軟石は切り出す深さで強度にムラがあることから戦後すぐの建築基準法の改定により、組積造建築には厳しい制限が加えられ、やがてこの工法による建築は衰退しました。しかし現在は解体された軟石建築の軟石を外壁材や内装材として再利用する新しいニーズが生まれています。

軟石建築による景観文化は、札幌や北海道のブランドとして地域景観資源になるポテンシャルがあるので、引き続きどこにどのような建築物があるのかを掘り起こし再認識することが大切です。しかし、実際に軟石を切り出しているのはこの日に見学した辻石材工業（株）一社のみとなっており、現在そして今後のニーズを支える技術力を継承していく必要性・重要性をより多くの人に理解して欲しい、とまとめられました。

【第3部 パネルディスカッション「軟石を生かしたこれからのまちづくり」】

第3部のパネルディスカッションは、パネリストとして、講演をいただいた「札幌軟石文化を語る会」の佐藤俊義氏、軟石雑貨制作工房「軟石や」代表小原恵氏、またコメンテーターとしてNPO法人歴史的地域資産研究機構代表理事の角幸博氏を迎え、コーディネーター役を公益社団法人日本都市計画学会北海道支部副支部長小松正明が務めて開かれました。

以下に発言要旨を掲載します。

小原 恵氏：辻石材に入社したことをきっかけに、軟石にまつわる感動をより多くの人に伝えたいと思い、軟石の端材を使って家の形の”かおるいえ”というグッズを作りました。そんな活動が東海大学の学生たちとの作品やパン焼き窯、軟石を使ったワークショップ、石山緑地キャンドルナイトなどに発展しました。

2年前から、軟石工房「軟石や」を立ち上げて独立し、石山で創作活動を続け、札幌のお土産として認知が高まっていることを感じています。軟石を知ってもらうことは石山地区や札幌の歴史を紹介することにもつながると思い、これからも地域の魅力を発信したいと思います。

角 幸博氏：組積造での建築は今の基準法ではダメなこと、また古い建物も用途を変更しようとする構造物を強化しなくてはならず、そのままでは使えないという現実があります。



以前小樽で本州の方を対象とした見学会をした時に『軟石』という呼称は危うい石というイメージがある、という意見があつて面白いと思いましたが、今や『軟石』はブランドになりました。

軟石建築も含め、歴史的建築物を鑑賞することは、興味を持ち、好きになるということだと思つるので、それは地域にとっての力になって行くでしょう。

札幌市の景観行政活動では、いずれ文化財となりうるような将来資産として価値ある現代建築もリスト化しています。

私は建築物を評価するのに、『思い入れ価値』という概念を入れていますが、地域の人に愛されているということは一つの価値だと思います。壊されてなくなってしまう建物もありますが、建物を残したいと思つたら、その建物や持ち主を褒めちぎることが一番効果があります。外国人に対する観光振興の風潮もあつて、今は歴史的建物にとって追い風だと思います。

佐藤俊義氏：開拓の村のイベントで、外国の方に札幌軟石を説明するとき、「サッポロストーン」と言うと、目を丸くして喜んでくれました。物質としての溶結凝灰岩ではなく、札幌の軟石という物語をつたえることが大事です。好きなことは知ると話したくなります。それを語り合つて共有し、軟石好きを増やしたいと思つています。

会場の中からは、札幌建築鑑賞会の杉浦さんや、かつて石工だった地蔵さんからも発言があり、軟石にまつわる多面的な話題に触れることができました。

最後にコーディネーターの小松副支部長が、「明日からは皆さんにも軟石マニアになって、軟石建築をほめてください」とまとめました。

(文責：日本都市計画学会北海道支部 副支部長 小松正明)

